

明代東トルキスタンの交易路とその変遷

早 川 尚 志*

Trade Routes in the Eastern Turkistan in the Era of Ming and their Transition

Hisashi HAYAKAWA*

Abstract

Despite numerous studies on the transportation hubs in Eastern Turkistan that connect West Asia and China in the ancient and early modern time, there are few studies on the transition of trade routes in the period between the fall down of the Mongolian Empire (14th century) and the arrival of Portuguese missionaries (17th century). This study shows the main routes and the transition of trade routes in Eastern Turkistan in this period to fill the gap. A series of bibliographic survey of geographical documents and records of ambassadors and merchants who traveled this region reveal three main routes shown in the *Khīṭāi-nāma*, their transition, and the reason why the main route had changed.

1. 序 章

1.1. 本稿の目的

東トルキスタンは古代より西アジアと中国を結ぶ交易路の回廊であった¹。13世紀にモンゴル帝国が西アジアと中国をまたぐ領域を席捲すると、パクス・モンゴリカの下、この地は両地域を結ぶ交易路の中樞として大いに繁栄し [Grousset 1960: 383], 元の統治下、駅路が整備された [榎 1978a: 133]。元が衰退すると1331年までに東トルキスタンはチャガタイ系諸部族に征服され、中国で元にとって替った明も一転鎖国政策を取り始めた。当該地域は近代になって再び欧州の探検隊や使節団が入ってくるまでの間、使節や隊商の往復の少ない「暗黒期」[Yule 1913: 172-73] を迎えることになる²。

当該地域の交易路の道程と変遷についての研究は今日に至るまで精力的に続けられてきた³。とはいえ、その多くはモンゴル帝国以前の時代を対象とするもので、モンゴル帝国期衰退後、近代にいたるまでの期間を対象とす

* 京都大学大学院 総合生存学館 博士前期課程

1 既に漢代には西域に向かう程度固定した道程がいくつか存在していたことが視える。「自玉門・陽関出西域有兩道。從鄯善，傍南山北，波河西行至莎車爲南道。南道西踰葱嶺則出大月氏・安息。自車師前王廷，隨北山，波河西行至疏勒爲北道。北道西踰葱嶺則出大宛・康居・奄蔡焉」(漢書西域伝上: 3872)。

2 明王朝の門戸を最初に開いた欧州の国はポルトガルである。1557年にマカオの永住権を獲得し、1600年に初めてマテオ・リッチなどイエズス会の一団が北京入りした [明史神宗本紀二: 282]。マルコ・ポーロのいうカタイオがリッチの到達したチーナと同じか確認すべくアグラから後述のゴーエシュが派遣され [BG: N 805-6], 彼の嘉峪関到着の報告と手記がリッチの許に届いて初めてカタイオが中国の領域と一致することが確認された。

3 東トルキスタンの交易路を考古学的に検討した代表的なものには [Hedin 1899; 1966; Stein 1907; 1921; 1923; 1928; 1933] など大戦期以前の西欧の探検隊が残した一連の報告書があり、当該地域の遺跡の様子、大戦期以前の地名を伝えている点で、その記述・地図共に有用である。当該地域を扱った東西の史料を収集したものには [Yule 1913; Bretschneider 1910] がある。清代以降の東トルキスタンの交通事情は [新疆図志] に詳しい。こうした史料や報告書に基づいて当該地域の交易路について検討したものには [松田 1956] がある。

る研究はさほど多くない。明朝と西アジアとの交易のシステム⁴や当代の個々の使節⁵について検討した研究は知られているが、交易路の道程とその変遷自体を検討したものは管見の限り、僅かに[Shaw 1876]があるのみで、本格的な研究はあまりなされてこなかった。しかし、モンゴル帝国崩壊後、近代に至るまでの当該地域の交易路の道程と変遷を究明することは、モンゴル帝国期以前の古代の東西交渉史と、近現代に大国間で分割された後再び中国の「新シルクロード構想」により再統合に向かいつつある当該地域の動態との間の空白を埋める上で極めて重要となり得よう。

そこで本稿では元衰退後、近代になって再び欧州人が入ってくるまでの期間、即ち14～17世紀もしくは明代のトルキスタンの「暗黒期」に焦点を当て、当時の主要交易路の道程の特定、交易路の変遷と興廃、及びその理由について究明することを企図し、当該地域を往復した使節記・旅行記や地理書を検討する⁶。これにより、当該地域の交易路の道程がいかにして近現代の道程に収束していったか、その過程の一端を明らかにする。

1.2. 明代東トルキスタン

本論に先立ち、明代東トルキスタンの情勢について確認しておこう⁷。

14世紀に元とチャガタイ・ウルスが衰退すると、中国では明、西トルキスタンや西アジアではティムール朝がこれに取って代わり、東トルキスタンはモグール・ウルスの占めるところとなった。モグール・ウルスは初期においてアルマリクを主邑とするイリ河谷を中心とし、西はタシュケント・ヤスから東はバルスキョル、北はイルティシュ川から南はホタンに至るまでを占めていた。

ところが15世紀半ばからオイラト⁸やウズベクなど新たな遊牧勢力が勃興し、事態は変化する[濱田 1998: 100-3]。オイラトはモンゴル高原から西方へ転じ、東トルキスタンで活動を開始し[間野 1964: 14; Millward 2007: 72; Kara 2010: 167]、モグール・ウルスを圧迫し始める[間野 1977: 189-192; Jackson 1991; 濱田 1998: 103]。

ティムール朝も1447年にシャー・ルフが没すると、度重なる内乱で弛緩し、最終的にウズベクのシャイバーニー・ハンによって1500年にはサマルカンドを、1507年にはヘラートを奪われ、西トルキスタンから一掃された。

16世紀に入ると、15世紀中葉以降からの動乱は一段落する。東トルキスタンでは14世紀中葉16万人いた遊牧モグール人がオイラト等の新興遊牧勢力に吸収されて16世紀中葉までに3万人にまで減じ、その主体が天山山脈以南の定住民に取って代わられる[間野 1998: 191]。その結果、天山山脈をはさんで南にモグール・ウルス、北にオイラトなどの遊牧民が並び立ち、この構図は17世紀初頭まで続いた。西トルキスタンでも同様で、シャイバーニー朝がティムール朝の残党を一掃して覇を唱え、西アジアのサファヴィー朝やオスマン朝と鼎立することになる。

以上を見ると、この時代はティムール朝、遊牧民主体のモグール・ウルス、明が併存した14-15世紀と、シャイバーニー朝、定住民主体のモグール・ウルス、明が併存した16世紀の二つの時期に分けることができる。

4 代表的なものには[羽田明 1965; 榎 1978a]がある。

5 こちらについては本稿で当該の使節や史料を紹介することに随時紹介していく。

6 同様の研究手法については[羽田亨 1957]が中国からカラコルムに至る交易路の道程を検討する際に用いられている。「駅路は元来使人往復の為に設けられたること記述の如く、之が設置の年即ち1235年以後…支那より和林方面に至りし官人の行路を研究、之に其前後の有様を徴することに於いてはほその正鵠を失わざることを得んか」[羽田亨 1957: 26]。

7 当時の東トルキスタンの情勢とその変遷は[間野 1977; Jackson 1991; 濱田 1998]に詳しい。

8 彼等は中国史料には「瓦剌」、ムスリム側の記録には“Qalmāq/Kalmāk”として現れる[Guchinova 2006: 11]。

1.3. 本論の構成

以上、本論に入る前に明代東トルキスタンの情勢を概観した。本論では東トルキスタンの交易路について、当時の情勢を踏まえ、まず14–15世紀の、続いて章を分けて16世紀の史料が示す道程と記述を時代順に検討する⁹。

この際前者においては、1395–1409年に明からティムール朝に派遣された傅安についての記述、同時代のティムール朝史書ザファルナーマ [ZN I-II] の関連記述、1413–15年に明からティムール朝に派遣された陳誠の使節記 [番国志; 行程記]、1419–22年にティムール朝から明に派遣されたナッカーシュの使節記 [GN] を検討する。

後者では1514–15年に明で成立した『西域土地人物略』[人物略]、1516年にイスタンブルで成立したヒタイナーマ [KhN]、1546–47年に成立したモグール・ウルスの史書ターリーヒ・ラシーディー [TR]、1551–53年頃明からヴェネツィアまで旅した商人ハッジ・ムハンマドの記述 [HM]、1554–62年にイスタンブルに滞在したブスベックが旅のトルコ人ホージャからの伝聞を書き留めた記述 [TD]、1603–07年にムガル帝国の帝都アグラから明の嘉峪関・肅州まで派遣されたベントー・ディ・ゴーエシュの旅行記 [BG] を検討する。

以上の史料を検討し、明代東トルキスタンの交易路の道程と変遷を描き出し、その理由を検討する。これによって当該地域の交易路の道程がいかにして古代のものから近現代の道程に収束していったか、その過程の一端を明らかにする。

2. 14–15世紀における東トルキスタンの交易路についての記述¹⁰

2.1. 傅安：1395–1409年

明代東トルキスタンを往復した使節の内初めて詳しく記録が残されたのは傅安¹¹である。彼は洪武帝の命令で1395年にサマルカンドに派遣されるも、ティムールが対明遠征を準備していたためかサマルカンドにて13年間拘留され [明史西域伝四：8598–9, 8609]、1409年になって漸く解放されて帰国を果たした [明史西域伝一：8527]。

この際、往路にて傅安が通った道程は、

【道程1】嘉峪関—流沙—哈密（ハミ）—瀚海—古高昌（カラホージャ）—亦剌八里（イリバリク）—撒馬兒罕（サマルカンド）—討落思（タブリーズ）—乙思不罕（イスファハーン）—失刺思（シーラーズ）—黒魯（ヘラート）

というものであったという¹² [榎 1978b: 144; Goodrich 1976: 229] 【地図1】。トルファンからイリ河谷経由でサマルカンドに向かったことが窺える。

-
- 9 隊商の通る交易路が隊商宿や駅付帯に都市間を結ぶのに対し、軍勢の遠征路は峠や隘路に制約される他は牧草地帯に進み得るため、両者が必ずしも一致しないことについては注意を要する [Aubin 1971: 107]。それ故本稿では同時代の軍勢の遠征路については検討せず、次稿以降への課題としたい。14–15世紀のティムール朝による遠征の事例については [早川 2014] 参照。
- 10 本章は第21回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会（2014年7月5–6日、金沢大学）での発表及びそのプロシーディングス [早川 2014] の内容に修正を加えたものである。発表時に出席者の方々から有益な指摘・助言をいただいた。ここに記して謝意を表する。
- 11 傅安自身は陳誠のように自ら記録を残すことはなかったが [Rajkai 2007: 62]、明史、明実録などに彼についての断片的な記述が見られる。主な研究には Bretschneider 1910; 榎 1978b; Rossabi 1976; Goodrich 1976] がある。
- 12 以下、地名・人名の表記については、史料に現れたものについてはその表記に従い、それ以外の場合では慣用名に従うことにする。（例）Andigān（史料）、アンディジャーン（その他）

傅安はこの時の西域奉使を含め、都合6回西域に向かっており、内3回がサマルカンド、残り3回がビシュバリク¹³即ちモグール・ウルスを目指したものであったという〔榎 1978b: 152〕。

2.2. Zafarnāma : 1398–1405年

傅安の西域奉使と前後して、〔ZN〕にも東トルキスタンについての記述が見える。1398–99年に行われたミールザー・イスカンドル（Mīrzā Iskandar）のモグーリスタン遠征に伴う記述として、〔ZN〕は当時の東トルキスタンの主要都市間の移動の所要日数と共に、以下の二つの道程を挙げている〔ZN II: 219–20〕¹⁴【道程2】【地図2】。

(ii) Khutan—35宿駅—Qarā Khwāja—31宿駅—Titqāul（嘉峪関）¹⁵

(iii) Samarqand—25宿駅—Kāšgar—15日—Khutan—40日—Titqāul（嘉峪関）

ここで興味深い点は、カシュガル～ホタン～嘉峪関の道程を除いていずれも道程が宿駅（manzil）の数で示されている点¹⁶である。この記事から、後の〔KhN〕や〔TR〕に見えるように、当時の東トルキスタンでも宿駅の制度が保持されており、その間隔が相当に密であったことが窺える。(ii)のルートについては、道程が日数で示されており、特にホタン～嘉峪関間の道は「耕地は皆無で果てしない砂漠が広がっている」〔ZN II: 220〕とされており、宿駅が維持されていなかった可能性が窺える。

また、1405年にティムールが明へ遠征する直前の記事も興味深い。曰く「惜しめない好意持てる者（ティムール）は Tāškant, Sayrām, Yāngī¹⁷, Ašpara¹⁸, そして Jata 諸国¹⁹全域を Khīṭai に至るまで Amīrzāda Ulūg Bīg に割り当てるよう命じた。そして, Andigān, Afšikant, Ṭarāz, Kāšgar を Khutan に至るまでとその周辺を Amīrzāda Ibrahīm Sultān に割り当てるよう命じた」〔ZN II: 633〕という。

以上より、以下の二点が明らかになる。

- ①この時代の東トルキスタンの交易路には、フェルガナ盆地からカシュガル、ホタンと続くルートがあり、ホタン以降、カラホージャ／高昌経由で嘉峪関を目指すルート、直接嘉峪関を目指すルートの二つがあり、少なくとも前者のルートでは宿駅が密に維持されていたこと。
- ②当時、中国に向かうルートは大きく二つあり、①で述べたルートのほかにタシュケント、サイラム、ヤンギ、アシュバラ、モグーリスタンと天山山脈北麓もしくは天山山中を経由するものがあった。このことはティムールの事前の領土分配に際しても意識されたこと。これらは各々、後述の〔KhN〕でいうモグール道²⁰、

13 こうした漢文史料で用いられる「イリバリク」や「ビシュバリク」という名称は都市としての北庭故城を指すのではなく、モグーリスタン・ハン国の別称であることに注意しておく必要がある〔丸山 2009: 152〕。

14 これに注目した先行研究としては〔Barthold 1958; 満井 1939〕がある。

15 ペルシア語史料では嘉峪関には Titqāul, Qarāwul という二通りの名を与えられている。これらの名称は各々モンゴル語由来で「物見」「斥候」を意味していた〔Doerfer 1963: 252, 399〕。

16 同様の例は〔NQ: 164〕にも見える。イランにおける距離の度量衡が統一されていなかったことを述べる文脈で、フレグ・ウルス西方の「ルーム、グルジスタン、アラーン、ムーガーン、シルヴァーンにおいてファルサフは用いられておらず、距離は宿駅（manzil）と所要時間でもって数えられていた」という事例が言及されている。

17 Yāngī はモグール人による Ṭarāz の別称〔TR: 205〕。モグーリスタンの主要都市として、Balāsāqūn, Almālg, Yūmgāl と並んで紹介されている。

18 アシュバラはしばしばティムール朝のモグール遠征の拠点になったようで、ティムールがムハンマド・スルターンに命じて砦と穀倉の建設を命じた記述も見える〔ZN II: 12〕。

19 モグール・ウルスのこと。〔間野 1964: 2〕参照。

20 バルトリドもこれに気付いており、ティムールによる中国遠征はフェルガナからタリム盆地に入るルートではなく1389年のモグール・ウルス遠征の時と同様、シル川からセミレチエ、イリ河谷と進むルートで計画されていたことを指摘してい

ホタン道に相当すると思われる。

2.3. 陳誠・李暹：1413–15年

1405年、ティムールが対明遠征途上、オトラルで客死した後、ティムール朝は後継者争いに見舞われた。その勝者シャー・ルフの許、ティムール朝と明の外交関係は劇的に改善していく [Fletcher 1968: 209–16; Millward 2007: 72]。先述の傅安が解放されて帰国を果たしたのも、シャー・ルフの許でのことであった [小野 2010: 276]。

そして1413年には明の宮廷にサマルカンドを筆頭に西域9ヶ国が「朝貢」し、これらの使臣を送り届けるべく、永楽帝はヘラート方面へ陳誠・李暹を首班とする使節団を派遣した [明史西域伝四: 8610]。この際に書かれたのが [番国志] [行程記]²¹の二巻である [明史藝文志二: 2419]。

その実際の行程は [行程記] に日誌形式で毎日の移動を緻密に記録されている。惜しむらくは記録が往路のみに留まる事であろうか。比定に問題のある場所も多いため、行程中、明史外国伝にも見える地名のみを抜粋すると、以下ようになる【地図3】。

【道程3】 嘉峪関—哈密（ハミ）—火州城（カラホージャ）—吐爾番城（トルファン）—崖兒城（交河故城）—（托遜—ユルドゥズ草原²²—イリ河沿いに西進）—阿力馬力口子（アルマリク）—亦息渴兒（イシククル）—養夷城（ヤンギ）—塞藍（サイラム）—達失干（タシュケント）—石刺思（シーラーズ）²³—撒馬兒罕（サマルカンド）—渴石城（ケシュ）—迭里米（テルメズ）—八剌黑（バルフ）—俺都匯（アンドゥホイ）—哈烈（ヘラート）

[行程記] にはなお比定に問題の残る個所も多いものの、トクスンからアルゴイ川を遡ってユルドゥズ草原に入り、イリ河伝いにティムール朝領内に入るというルート [松田 1956: 270–3] が精緻に再現できる点で非常に価値がある。このルートは [KhN] の「モグール道」に一致すると思われるが、それについては後述する。また宿場や野営の記事も目立つ。明代東トルキスタンの交通体系について検討する際、改めて精読を要する史料といえよう。

2.4. Giyāth al-dīn Naqqāsh : 1419–22年

前述の陳誠・李暹の遣使の後、幾度かシャー・ルフと永楽帝の間を両国の使節団が往復した [小野 2010: 280–81]。1419年にシャー・ルフを筆頭に6人のティムール朝の君侯たちが合同使節団を派遣し、その内の一人アミールザーデ・バイスングルの使節として参加したのがナッカーシュ²⁴であった [GN: 383v.–384r.]。

る [Barthold 1958: 51]。

21 陳誠・李暹の記録、特に [番国志] は古来大いに注目を集め、研究も多岐にわたる。英文による訳注には [Rossabi 1976] があるが、扱っているのは [番国志] のごく一部のみである。実際の行程を含めてこの史料を正面から取り上げた研究には [Bretschneider 1910; 神田 1927; 満井 1939; Rossabi 1976; Bruno 1985; Karimova 2003] がある。[間野 1964] でもこの作品は活用されている。

22 ユルドゥズについての記述は [Mannerheim 1969: 282] に詳しい。

23 ファールス地方の首邑シーラーズと同名のサマルカンド近郊の集落。[HAM: 170a] では Šīrāz はサマルカンドの諸テュメンの一つに数えられている [川口 2011: 77]。なお、[HAM] については [川口 2011: 62; Subtelny 2002] に詳しい。

24 陳誠・李暹の記録同様、ナッカーシュの記録も古くから注目を集めてきた。主な研究には [Dunlop 1946; 宮崎 1947; Barthold 1958; Barthold 1962; Surreys 1967; 榎 1974; 1978a; Soucek 2001] があり、訳注には [Yule 1915; 小野 2010] がある。特に後者はオックスフォード大学蔵写本 Oxford, Bodleian Library, Elliot 422 の写真版と和訳を提示し、我が国の研究者のナッカーシュの旅行記へのアクセスを極めて容易にした点で称賛に値する。

ナッカーシュは1419年11月24日にシャーディー・ホージャ (Šādī Khwāja) の指揮下、ヘラートを出発し、1422年8月29日に帰還した [GN: 383v.]。彼は元来日誌 (rūznāma) 形式で記録を残していたようだが、引用されたのは摘要のみであり [GN: 384r.]、地理情報についてさして詳しい記述は残していない。彼の辿った道程上の地名を拾うと以下のようなになる【地図4】。

【道程4】(往路) Harāt—Balkh—Kālif²⁵—Samarqand—Tāškant—Sayrām—Ašpara—Muḡul 人の領内／良好な牧草地—Bilgūtū—Kūngāz 川—Yuldūz 草原—峻険な山谷が続く—Turfān—Qarā Khwāja (高昌)—Sūfi-Ata—Qāmūl (哈密)—Qarāwul (嘉峪関)—Sukjū (肅州)

【道程5】(復路) Qarāwul (嘉峪関)—砂漠の道—Khutan—Kāšgar—Andigān (分岐点)—(i) Samarqand/—(ii) Hišār-i Šādmān²⁶—Balkh—Harāt

地理情報をあまり詳述していないにも拘らず、[GN] は陳誠の記述と対照するとかなり示唆に富む史料である。彼の史料より以下の点が覗えよう。

①ナッカーシュの一行は往路において陳誠とほぼ同じ道程を辿っており、この道程(後述する [KhN] でいう「モグール道」と思われる)がかなりの程度固定されたルートとして用いられていた点。

②帰路ではホタン経由の道程を通っているが、これは「モグーリスターンあたりで騒乱あり」という情報を受け…騒乱を恐れて砂漠の道を選択した」[GN: 411v.–412r.] 結果である点。

ホタン、カシュガルを通る②の道程は後述の [KhN] の「ホタン道」に一致する可能性が指摘されている [小野 2010: 293]。またこの嘉峪関～ホタン間の「砂漠の道」の道程は [ZNII: 220] に見えるホタンと嘉峪関を直接結ぶルートの記述と酷似することから、トルファンを経由するものではなく、タリム盆地南縁沿いに直接ホタンへと向かうものである。なお、[GN] の「騒乱」はモグール・ウルスのヴァイス・ハン(歪思)とオイラトのタイピン(太平)の交戦によるものであったことが [明実録] の記述より判明している [小野 2010: 293]。

3. 16世紀における東トルキスタンの交易路についての記述

3.1. 西域土地人物略：成立1514–5年

[人物略]²⁷は西アジアの、恐らくはオスマン朝の使節のもたらした情報に基づき [堀 1978: 37]、1514–15年成立した西域関連史料である [堀 1982: 841]。堀は既に [Bretschneider 1910: 329–32] で紹介されていた、

肅州—哈密—トルファン—チャリーシュ²⁸—クチャー—アクス—カシュガル

というルートに加え、「北／南に○○有り」として付記されている地名を結び付ければ別の併行ルートを復元可能であるとし、図1の通り3ルートを復元している [堀 1978: 42–45]。

25 テルメズから二日行程にあるアム河の渡し場 [NQ: 106, HAM: 172b]。[BN] には Kilif と見える [BN: 49]。

26 現タジキスタン領のヒサル [Le Strange 1905: 440]。アンディジャーンからバルフへの道程はヒサルを経由していることから、ヴァフシュ川沿いにヒサルまで進み、スルハンダリア川沿いにアム河へ下るルートに比定されよう。

27 [人物略] は [Bretschneider 1910] にて紹介されて以来、その起源と叙述内容が議論の対象になり、[和田 1958; 羽田明 1965] によりオスマン朝から明への朝貢使節と関連付けられた。

28 明代の察力失。現カラシャール。[HM] に見える Chialis も同様。[丸山 2013: 73] 参照。

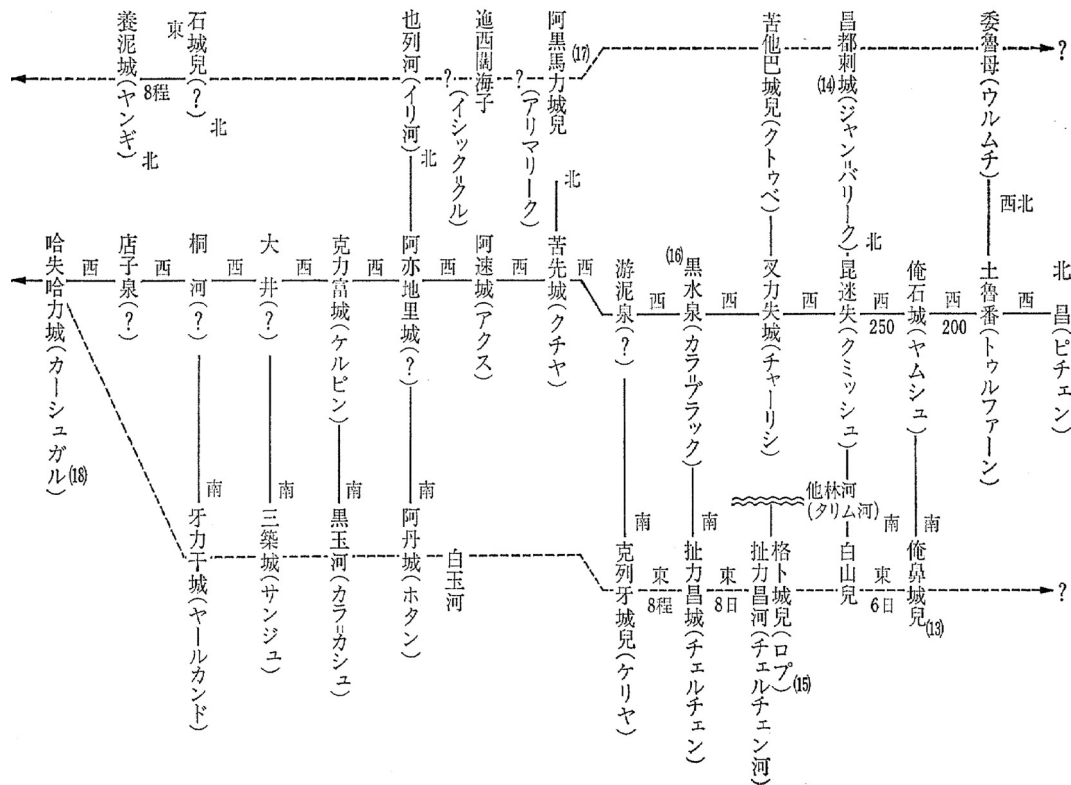


図1：『西域土地人物略』に見える道程 [堀 1978: 45, 図2] より

以上「人物略」の叙述及び「堀 1978」を筆頭としたそれに対する研究より、東トルキスタン周辺では、

- ① 委魯母～養泥城：天山北麓からイリ河谷²⁹に続く北併行路
- ② 北昌城～哈失哈力城：天山南麓を進む中央幹線
- ③ 俺花城兒～牙力干城：タリム盆地南縁を進む南併行路

の3ルートが知られていたことが判明する。特に、③のタリム盆地南縁ルートの記述は「GN」の帰路に使われたものの情報量の少ない「砂漠の道」について有益な示唆を与える。

3.2. Khitānāma：成立1516年

先述の「人物略」と前後して西方で成立している史料に、アリー・アクバル・キターイーの「KhN」³⁰がある。

「KhN」にて注目すべきは3つの交易路を名前と共に紹介している点である。

「(カタイへは) イスラームの地より陸路で3つの道 (rāh) がある。第一は Kaśmīr 道, 第二は Muğulistān 道, 第三は Khutan 道である。Kaśmīr 道, Khutan 道では住民の民度が高く, 水と牧草が豊富である。最初の15日 (行

29 也列川は「堀 1978」ではイリ河に比定されているのは、イシククル湖との地理関係が逆転していることからやや奇異である。「堀 1978」の比定が正しければ、「人物略」の段階で既に北並行路についての具体的な知識は失われつつあったのかもしれない。この仮定が正しければ、この書にウルドゥズ語の道程が反映されていないことも頷ける。

30 この史料自体の記述によると、成立はH 922年 ラビー・アル・アウワル月 (1516年4～5月)、イスタンブルでのことである「KhN: 174」。原本はペルシア語で書かれており、オスマン語の流布本も存在している。「Yule 1913」で取り上げられなかったためか、正面からこの史料を扱う専論は多くない。この史料の原文を紹介し、仏文の訳文・注解を附して紹介したのは「Schefer 1883」で、叙述内容を分析・紹介したものには「小田 1969; Yazici 1985」がある。また「小野 2010」もその解説の中で「KhN」の秘める重要性について言及している。

程)は水と牧草が少ないが、どの宿駅 (manzil) でも人の背丈分掘れば豊かな水が湧き出る。一部の場所では手の長さ分掘ると水が湧き出る」[KhN: 39]。各々については「Muğul 道、即ちČagatai 王国は良い街道である。Mir Tīmūr はその道から行軍しようと決意し、命じて曰く、全ての宿駅に砦を造るべし。全ての砦に幾千の軍を配し、耕作せしめ、穀物を集めさせるべしと。そして軍がこの地を進軍するとも窮乏に至らしめるなかれと…(中略)…Jaiḥūn の畔から Kḥīṭai の国境までは3ヶ月行程で、毎日一つの宿駅があり、[神の如き世界征服者陛下の兵士が2日行程毎に駐在し、]嘉峪関 Darband-i Sukjū に至る」[KhN: 39-40]と叙述している。残念ながら [KhN] は各々の道についてこれ以上の詳細を述べていないが、以上の記述より、

①東トルキスタンには3つの道が存在し、各々がカシュミール道、モグール道、ホタン道という名称で呼ばれていたこと

②いずれの道でも宿駅 (manzil)³¹が存在していたこと

③モグール道はティムールの対明遠征路として想定され、宿駅が整備されていたこと

等が判明する。③については [ZN] の記述に基づく先述の [Barthold 1958: 51] の考察を裏付けるものであると言えよう。但し、他の二道に対し、カシュミール道がどこを指したのかは情報量があまりに少ないので、この段階では判断できない。

3.3. Tārīkh-i Rašīdī: 成立1546-7年

モグール・ウルスについて研究する上で [TR] を欠かすことはできない。著者のミールザー・ハイダル (Mirzā Muhammad Ḥaidar Duḡlāt Big) はカシュミールのチャガタイ系君侯で、H 953/1546-47年に [TR] を完成し、モグール・ウルス一帯についての詳細な歴史記述を残している [間野 1984: 95]。当該地域の地理記述についても [TR] は有用で、本稿の研究にも裨益するところが大きい³²。

[TR] ではまず、チンギス・ハン時代のカシュガルについての記述に続けて、カシュガル～ホタンの道程とその周辺の地理記述を行っている [TR: 139b-140b]。まず、タシュケント (Šās)～トルファン間は3ヶ月行程であると述べた上で、ホタンの東方にはかつて Lūb Kātak を始めとした古代都市があったものの、執筆当時には誰も住むもの無き荒漠たる砂漠となっていたという点に言及している。そしてカシュガル～ホタンの以下のような道程が述べられる³³。カシュガル～ホタンは1ヶ月行程とされている [TR: 139b] 【道程6】 【地図5】。

Kāšgar—3F³⁴—Qarā Tāzgūn 川—3F—Yāngī-Ḥiṣār—6F—Qarā-Čanāq—5F—Kilfin Ribāṭ—Qūš Gunbadh—Qiztl—10F—Kūk Ribāṭ—7F—Ribāṭcī—Yārkand—7F—Tiz-āb—3日—Lākhūq—10日—Khutan

このルート上、Qarā-Čanāq と Ribāṭcī の間には宿駅以外人は住んでいないという [TR: 140]。また、923年のサリグ・ウイグル遠征についての記事も、この記述を補足している。曰く、「彼 (スルタン・サイード・ハン) は聖

31 同様の宿駅についての記述は先述の [ZN]、後述の [TR] にも見える。詳しくは各々の箇所を参照のこと。

32 彼の地理的記述は古くより注目されており、既に19世紀末には [Shaw 1876] においてその英訳と研究が発表され、英露の「グレートゲーム」が本格化する中、中央アジアの地理研究の貴重な一次情報として紹介されていた。この史料の英訳には [Denison 1895; Thackston 1996] があり、その注釈中の地名比定も有用である。我が国でも [榎 1978a] において、明代東トルキスタンの交通史研究における重要資料として紹介が行われている。

33 各々の地名比定については [Shaw 1876] を参照のこと。

34 以下便宜上ファルサフに F という略号を用いる。

戦の計画についてアミールたちと語り、ついに Sārīg Uġūr という名で知られる, Khitai と Khutan の間に住まう異教徒たちに対して聖戦を行うことを決断した。Yärkand から Khutan までは12日行程で、道中の宿駅のほとんどが村落や集落であった」[TR: 199b] という。このルートは [GN] で帰路採られた「砂漠の道」や [KhN] に見える「ホタン道」を示しているものと思われる。詳細については4.1.にて考察する。

[TR] では、天山山脈南麓をモグール・ウルスの南縁とし、筆者自身の知見に基づいて記している [TR: 205b]。曰くその南側の道程は【地図5】、

【道程7】 Tāškand—10日—Andijān—20日—Kāšgar—15日—Aqsū—20日—Čālīš—15日—Turfān—15日—Bārskūl

というもので、全3ヶ月行程に90の宿駅があったという [TR: 205b]。これは [人物略] の紹介するメインルートや後述の [HM; BG] で用いられた道程と一致する。このルートは当時モグール・ウルスのメインルートとなっていたようで、スルターン・マフムード・ハン (Sultān Maḥmūd Khān) がモグール・ウルスを継承した際、その版図は「Khitai の境域から Kāšgar に至るまで、即ち Turfān, Čālīš, Kūčā, Aqsū, Uč」[TR: 65b] と描かれている。1516年 (H 922) にスルターン・サイイド・ハンが兄のマンスール・ハンに従属した結果「両者の間には固い友情があり、それ故20年の間大いなる平和と安全があり、個人が独りで Khitai の Qāmūl から Andijān まで糧食の必要もなく旅することができ、毎晩誰かの家に客として招かれるほどであった」[TR: 47] とされている。この和約の結果、1460年代の明とトルファン=チャガタイ家の哈密を巡る系争以来阻害されてきた東西交通が一挙に容易になったという [Millward 2007: 74]。なお、この和約でマンスール・ハンは「Čālīš, Turfān, Aqsū, Moġūlistān (イリ河谷) 全土」[TR: 155] を取り、スルターン・サイイド・ハンはカシュガル、ヤルカンド、ホタン等のカシュガリア地方を安堵された [Millward 2007: 74]。

また、インド方面への交易路についての言及もなされている。

ヤルカンドからバダフシャーン、カシュミールは各々「夏の日没の方角」, 「冬の日没の方角」にあり、その行程は以下の通りである³⁵ [TR: 161b] 【道程8】 【地図5】。

Yärkand—Pamīr/7～8日—Badakhshān

Yärkand—Sānjū—20日—Aškārdū—Kašmīr

また、ミールザー・アブーバクルの子ボスタンギール・ミールザー (Bustangīr Mīrzā) はカシュガルから逃亡し、インド方面に抜けた後、ウズベクの庇護下に落ち着いているが、その経路は、カシュガル→チベット (ラダック)→カシュミール→ヒンドスタン→カーブル→バダフシャーン、というもので [TR: 152], 【道程8】を南側で廻り込むようなものであった。

3.4. Ḥajjī Muḥammad : 1551–53年頃

ヨーロッパ初の東方旅行記集を編纂したのはヴェネツィアのラムージオ (Giovanni Battista Ramusio) であった。

35 このルートは1873–74年フォーサイス (Forsyth) 卿によって探検され、地図にまとめられている [Forsyth 1875: 245]。当時のスカルドゥについては [Dani 2003] に詳しい。

彼はマルコ・ポーロを筆頭に著名な旅人の記録を蒐集し、イタリア語に翻訳し、“*Navigazioni e Viaggi*”という作品を著した [Bernardini 2007]。これに収録された作品の中に、イランはギーラーンの商人で、1551–53年 [D’Avezac 1865: 60] にかけて中国の肅州で大黄を買い付け、ヴェネツィアまで旅したハッジ・ムハンマド (Hajjī Muḥammad: 原文では Chaggi Memet) の記録³⁶がある [HM: 14v.]。

[HM] の記述の中でもとりわけ興味を引くのは甘州からタブリーズまでの道程についての一連の記述である。これは往路彼が中国に向けてとったルートを逆順に記述したものである [HM: 16v.]。

他の史料に見られない点として、彼はまず一日の行程が距離にしてどのくらいかを述べている。曰く「毎日数ファルサフ (farsenc)³⁷進む (1 ペルシアファルサフは我々の3マイルに当たる)。1日の行程は8ファルサフであるが、その砂漠や山地では半分も進まないの、砂漠での行程は通常の行程の半分となる」[HM: 16r.] という。

また、甘州からタブリーズまでの道程は以下の如くである [HM: 16r.] 【地図6】。

【道程9】Campion (甘州)—6日—Gauta (高台)—5日—Succuir (肅州)—15日—Camul (哈密)—13日 (ムスリムと偶像崇拜者の居住地の境界)—Turfon (土魯番)—10日—Chialis (カラシャール)—10日—Chuchi (クチャ)—20日—Acsú (アクス)—20日 (最も困難な砂漠)—Cascar—25日—Samarcand—5日—Bochara (ブハラ)—20日—Eri (ヘラート)³⁸—15日—Vermi (ヴァラミーン)³⁹—6日—Casbin (ガズヴィーン)—4日—Soltania (スルトニア)—6日—Tauris (タブリーズ)

以上より [HM] の道程は [人物略] で紹介された幹線路たる②天山南麓ルートであったことが分かる。ブハラ・ヘラート間のルートについてはフレグ・ウルス期 [NQ: 178–79] と同様、今日のトルクメニスタンのファラップ国境でアム河を渡って南西に向かい、メルヴからムルガープ川を遡ってヘラートに南下するという道程であろう⁴⁰。

3.5. トルコ人ホージャの記録：成立1554–62年頃

続いて明への道についての情報を書き残しているのは、ブスベック (Ogier Ghiselin de Busbecq)⁴¹である。

彼の記録には、具体的な交易路の道程についての記述は見られないが、なおいくつかの記述は本稿においても

36 この記録についての先行研究には [D’Avezac 1865; Yule 1913; Veneri 2012] がある。

37 [Houtum-Schindler 1888: 588] の研究によると、1ファルサフ=6.3 km というので、仮にこの当時も同じ長さを示していたとして、平野での1日行程は50.4 km となる。大量の荷駄獣を引き連れた隊商が一日でこの距離を移動するのが本当に可能かどうか、明代においてペルシア語の“farsakh”がどの程度の長さを示していたのかも含めて、一日の行程が正確にどのくらいの長さを示したものであったかということは未解決の問題ながら、究明は次項に譲りたい。

38 以下 [HM] に見えるヘラート～スルターニーヤ間の道程はフレグ・ウルス期の東王道 [NQ: 173–78] に一致している。

39 現ヴァラミーン (Varāmin). Jājrud 川の畔にあり、テヘランから南東に40 km の地点に立地している [Beaumont 1968: 169–70]。モンゴル軍がレイ (Rey) を壊滅させた後、その避難民が移住して興隆。15世紀には衰微し、テヘランに取って代わられる [Le Strange 1905: 216–17]。

40 少なくともメルヴ～ヘラート間についてはフレグ・ウルス期には王道があったことがその詳細な道程と共に14世紀の地理書 [NQ: 178–79] にて記述されている。ブハラ～メルヴ間は今もウズベキスタン・トルクメニスタン間を結ぶ主要幹線が通っている。

41 彼はベーメン王フェルディナント (Ferdinand) によりオスマン帝国に大使として派遣され、イスタンブルに1554–62年の間留まり、滞在中クリム半島に残るゴート人の末裔と接触し、ゴート語の語彙を記録したことで特に知られている [Considine 2008: 139–41]。彼はまたイスタンブル滞在中にカタイから旅してきたというトルコ人ホージャ (Hoggia Turcae vocant) と出会う機会があり、その際耳にした話をその書簡集の中に書き残している。ブスベックの記録に引用されたトルコ人ホージャの記事について正面から扱った先行研究は管見の限りでは、[Yule 1913] のみである。[Schefer 1883; 羽田明 1965] でも言及は見られるが、いずれも簡潔なものである。

注目に値する。トルコ人ホージャは大規模なキャラバンに参加して旅したというが、それは「大人数の集団に同行してかの国の境界まで旅するのが習わしだったからである。少人数集団のための道はなく、少なくとも安全ではない。不実な部族が道に巢食い、旅人はいついかなる時も彼らの攻撃に怯えねばならない」[TD: 205] からであった。また、この地域を旅する際は「どこでも糧食糧秣の欠乏が困難をもたらす。故にどの旅人も自身の生存に必要な食糧を携帯せねばならず、これを多数の駱駝に乗せて運ぶ」[TD: 206] としている。先の [TR] の記述に見えた1514年の両ハンの和約直後の交通状況から事態は一変しており、この頃までにモグール・ウルスを始めとした諸国が求心力を失い、主要交易路の治安維持も行えなくなり始めていたことが窺える。

3.6. Bento de Góis : 1603 – 07年

ゴーエシュ⁴²は1603年1月6日にアグラを出発した [BG: N 805-6]。そして彼はヤルカンドを經由して東トルキスタンを横断し、カタイオとキーナが同一の地であることを確かめ、1607年4月11日に肅州の地で客死した。

この際のゴーエシュの旅行記 [BG]⁴³は一度破棄されるも、マテオ・リッチの手で再編され、『中国キリスト教布教史』に組み込まれて出版された。

ゴーエシュは現地の商人が「毎年互いに協力して盗賊その他の襲撃を防ぐべく、400–500人の者が連れ立って Cascàr (カシュガル) の町まで出かける」[BG: N807] のに便乗し、概ね以下のような行程を辿った [BG: N807-N832] 【地図7】。

(ラホール～ヤルカンド: 1603年1月6日–11月) 【道程10】

Lahor—1月—Atheç—2月—Passàur (ペシャワール)—25日—Ghidel—20日—Cabùl (カーブル)—Ciaracàr (チャーリーカール)⁴⁴—10日—Parvàm (パルワーン)—20日—Aingharàm—15日—Calcìa—10日—Gialalabath—15日—Talhan (タリカン)—Chescàn—Tenghi-Badasciàm (バダフシャーンの悪路)—Badasciàm (バダフシャー)—1日—Ciarciunar (チャルチナル)—10日—Serpanil—20日／山道—Sarcòl (サリコル)—2日—Ciecialith (チチェクリク)⁴⁵—Tengethàr (ティンギタール)—15日—Jacorich (ヤカアリク)—5日—Hiarcàn (ヤルカンド)

42 ベントー・ディ・ゴーエシュはポルトガル領アゾレス諸島サンミゲルのヴィラフランカ (Villa Franca) 出身で、軍人としてインドに赴いた。その後イエズス会士となり、1595年にはムガル帝国の帝都アグラに赴いてそこで当時の皇帝アクバルの信を得た [Wessel 1924: 7-12]。当時ムガル帝国駐在のイエズス会士たちの間ではマルコ・ポーロたちの言うカタイオ (la Gran Cataio) やハンバル (Cambalù) と当時マテオ・リッチたちの駐在していたチーナ (Cina) やペッキーノ (Pechino) が同一の地を指すか、或いは別々の地を指したものであるかという議論が持ち上がっていた。そこで海路より近道の交易路がないか探究することも兼ね、ゴアの副王やムガル皇帝アクバルの援助の下、使節団が結成され、ゴーエシュがその団長となった。

43 [BG] はトリゴールによってラテン語に編訳され [Trigault 1616]、欧州にマルコ・ポーロ以来の中央アジア情報をもたらした、19世紀末に科学的な中央アジア調査が開始されるまでは、中央アジアの情報の典拠としては専らこれが用いられていたという [榎 1974: 162; Goodrich 1976: 472-4]。この旅行記について初めて言及したのは [Ritter 1832] である。後にこれを本格的に紹介したのが [Yule 1913] で、英文の訳注と紹介を附してこの史料の存在を広く学界に知らしめた。地名を含めて詳細に検討したものとしては、[Wessel 1924] があり、ゴーエシュの生涯を紹介すると共に、彼の記事にその後の科学的踏査の情報を加味し、詳しい考察を加えている。彼の生涯について簡潔にまとめたものとしては [Goodrich 1976] が挙げられ、わが国でも [榎 1974] がこの史料を正面から取り上げ、明末の肅州の状況について示唆に富む考察を行っている。

44 ヒンドウークシュ山中の要衝。[Balland 1990] 参照。

45 Chichiklik-dāwan として [Stein 1928iv: 5-map2] の地図に見える。Tāsh-Kurghān と Yangihisar, Yarkand の間の峡谷。[Stein 1923: 65]。

(ヤルカンド～嘉峪関：1604年11月14日－1605年12月22日)【道程11】

Hiarcàn (ヤルカンド) — Iolci — Honcialix — Alcegher (アクチェキル) — Habagateth — Egriàr — Meselelec — Tallec — Horma — Toantec — Mingieda — Capetacòl — Cilàn — Sare-Guebeedal — Cambasci (クムバシル) — Aconterzec (サクサク) — Ciacor (チャカル) — Acsù (アクス) — Oitogràc — Gràso — Casciani — Dellai — Saregabdel — Ugan (ウガン) — Cucia (クチャ) — 25日 — Cialis (カラシャール) — Puccian (ピチャン?)⁴⁶ — Turfàn (トルファン) — 15日 — Aramuth (ウルムチ?) — Camùl (哈密) — 9日 — Chiacun (嘉峪関)

(カシュガル～ホタン) [BG: N825] [BG: N819] 【道程12】

Cascar (カシュガル) — 5日 — Hiarcàn (ヤルカンド) — 10日 — Cotàm (ホタン)

また、彼はカラシャールから嘉峪関に至るまでの治安状況についても記述を残している。曰く「Cialis (カラシャール) から Cina (中国) に至るこの地全域では、Tartari 人による度重なる侵攻が続き、荒廃していた。それ故そこを旅する商人は常に大いなる不安と警戒の下にあった。その方法は、日中誰かが山に登り、遠くより Tartari 人の待ち伏せがないか、探しておくというものである。そして道が安全だとわかれば夜中に大いなる静寂の内に進むのである。一行は単独で行こうとして死んだ Saracen 人の遺体を道中たくさん目撃した」[BG: N833] という。なお、[BG] においてヤルカンド、ホタン、カラシャールのチャガタイ系の王族、そしてトルファン一帯の住民が Saracen 人と表現されていること [BG: N808, N829, N833]、万暦期 (1573－1620年) に瓦剌が西域を席捲していること⁴⁷から鑑みて、ここでいう Tartari 人とは即ちオイラトのことを示しているものと思われる。

以上より以下の点が視える。

- ①ムガル帝国の帝都アグラからカシュガルまでは定期的に隊商の往来があり、そのルートはペシャワールから一旦、カーブルに向かい、バダフシャーン経由でヤルカンドに向かうものであり、現在のようにフンザ経由でフンジュラブ峠を越えてヤルカンドを目指すものではない。
- ②ヤルカンドから嘉峪関までのメインルートは [人物略] や [HM] に見える如く、天山南麓を進むルートであり、カシュガルではなくヤルカンドがその一大ターミナルとなっていた。
- ③カシュガル、ヤルカンド、ホタンと進むルートは依然存在していたが、少なくともゴーエシュは何らかの理由から、ホタン経由で明を目指すことはなかった。
- ④ [BG: N833] に見える通り、既にカラシャールから嘉峪関までの間が「Tartari 人」の猛威にさらされ、安全な通行が困難になっていたことが視える。

4. 考察

4.1. 明代東トルキスタンの主要交易路

以上を通して、明代東トルキスタンの交易路についての記述を検討してきたが、その検討によって同定された交易路は以下の通りである【地図8】。

46 現鄯善。ピチャンは本来トルファンの西方に位置するため、[BG] におけるこの順序は不適當である。

47 「萬曆以後，瓦剌強盛，侵擾諸部。土魯番漸爲殘破。於是相率逃散。沙州僅有空城」[考古録: 6. 8a]。

①トルファン・イリ河ルート：モグール道

サマルカンドータシュケントーサイラムーヤンギーアシュパラーイシククル湖北岸ーアルマリクーイリ河谷ー
ユルドゥズ草原ートクスンートルファンー高昌（カラホージャ）ー哈密ー嘉峪関

②タリム盆地南縁ルート：ホタン道

サマルカンドーアンディジャーナーカシュガルーヤルカンドーホタンー砂漠の道（サリグ・ウイグル人領）ー嘉
峪関

※ホタンー高昌（カラホージャ）のルートもあり

③天山南麓ルート：[人物略]のメインルート

タシュケントーフェルガナーカシュガルー／ヤルカンドーアクスークチャーチャーリーシュ（カラシャール）ート
ルファンー高昌（カラホージャ）ー哈密ー嘉峪関

④インド・カシュガルルート

- (i) アグラーラホールーペシャワールーカーブルーバダフシャーナーヤルカンド
- (ii) アグラーカシュミールースカルドゥ峠ーサンジュ峠ーヤルカンド

ここで、各道についての記述を通時的に検討してみよう。

4. 1. 1. トルファン・イリ河ルート：モグール道

本稿に用いた史料中にてこのルートを用いたのは、傅安（1395～1409年）、陳誠・李暹（[行程記；番国志]: 1413～5年）、ナッカーシュ（[GN]: 1419～22年）といった面々である。

[ZN]にてティムールがこのルート経由で中国への遠征を企図し、遠征直前にこのルート上の版図をミールザー・ウルグ・ベグに約束し [Barthold 1958: 51], かつ [KhN]でもティムールが「モグール道」経由での中国遠征を企図したとの記述 [KhN: 39-40] があることから、既述の通り [KhN]のいう「モグール道」がこのルートに一致するとする [小野 2010]の比定は正鵠を射ている⁴⁸。

このルートが利用された年代に目を向けると、いずれの史料の記述も、上記の如く15世紀前半に集中していることが分かる。

4. 1. 2. タリム盆地南縁ルート：ホタン道

本稿に用いた史料中にてこのルートを用いたのは、ナッカーシュ（[GN]: 1419-22年）、ゴーエシュ（[BG]: 1602-07年）といった面々である。ティムールは対明遠征に出陣する直前にこの沿線の版図をミールザー・イブラヒム・スルターンに約束している [ZNII: 633]。

[TR]ではこの地域の道程・宿駅について詳細な記述されており [TR: 139b-140b], [ZN]ではホタンから嘉峪

48 このルートの特にアルマリクーイリ河ーユルドゥズートクスンの箇所は清代には「朱爾土斯路」即ち「ユルドゥズ路」と称され、しばしば用いられていたことが『西域聞見録』の記述から分かる [松田 1956: 271-3]。

関へ向かうルートが、高昌（カラホージャ）を経由するものも、直接嘉峪関に向かうものも示されている [ZNII: 219–20]。特に後者の記述は [GN] のいう嘉峪関・ホタン間の「砂漠の道」の記述 [GN: 412r.] と一致する。[KhN] の「ホタン道」でも宿駅の存在が指摘されている [KhN: 39] ことから、ホタンを経由して嘉峪関とカシュガル・フェルガナを結ぶこのルートは [KhN] に見える「ホタン道」に比定して差し支えあるまい。またこのルートに現れる地名は [人物略] に見える南側並行路と対応している。

[ZN] でホタン以東、高昌（カラホージャ）を経由するルートと直接嘉峪関に向かうルートが二つ紹介されたことは、明代になるとホタン以東チャルクリクやロプノールを経由するかつての西域南道が利用されなくなっていた事実 [榎 1978a: 138] を反映したものであったのかもしれない。

このルートは明代全般を通して利用されていたようだが、ホタンへアクセスする際 [ZN; TR; BG] や他のルートの利用が困難になった際 [GN] が主のようで、あくまでメインルートとしてではなく、南側のサブルートとして用いられたようである。

4.1.3. 天山南麓ルート

本稿に用いた史料中にてこのルートを用いたのは、[TR] の著者ハイダル・ミールザー自身 ([TR]: 成立1543年)、ハッジ・ムハンマド ([HM]: 1551–53年頃)、ゴーエシュ ([BG]: 1602–07年) といった面々で、16世紀に集中し、14–15世紀には利用例は少なかったようである。

陳誠はこのルートについて「其（別失八里）封域之内、惟魯陳（ルクチュン）、火州（カラホージャ）、土爾番（トルファン）、哈石哈（カシュガル）、阿力馬力（アルマリク）数處、略有城邑民居、田園巷陌、其他處所、雖有荒城故址、敗壁頽垣、悉皆荒穢。人多居山谷間、蓋為其國主微弱、恐為鄰境相侵故也」[番国志 102–03] とトルファン～カシュガル間の荒廃ぶりを強調し、[明実録] での朝貢事例もカシュガルが3回、クチャが2回、チャリーシュが2回と数も少ない上、各々の表記も「哈失哈兒／哈失哈」「苦先／苦察」「察力失／察力石」と揺れており [渡辺 1971: 1–39]、明から見た重要性も高くはなかったことが窺える。

先述のように [TR] によるとこの道には全3ヶ月行程に90の宿駅があった [TR: 205b] とされていた。1516年にカシュガルのスルターン・サイイド・ハンがマンスール・ハンに服属して以降、暫くモゲール・ウルス全域で平和が保たれ、16世紀初頭のこの頃、既にこのルートが東トルキスタンのメインルートになっていたことが窺える [TR: 47]。

この交易路は続く [HM; BG] においても用いられ、16世紀の間メインルートとしての地位を保っていたと思われるが、道中における情勢の記述は一変している。ハッジ・ムハンマドは隊商に参加して中国に向かい [HM: 14v.]、復路にはウズベクのイエシルバシュの使節団に便乗してイスタンブルに向かっている [HM: 16r.]。このすぐ後の [TD] の記述では、道中の危険、糧食の補給の困難さ [TD: 205–06] が強調されている。

[BG] でも特にカラシャール～中国間の道程の荒廃と危険について詳述されており、これは「Tartari 人の度重なる侵攻」によるものとされている [BG: N 833]。ここでいう Tartari 人とは先述のようにオイラトを指すものである。

このルートは [人物略] (1514–15年成立) にてメインルートとして紹介されていることから鑑みるに、そのオリジナルの情報をもたらしたオスマン帝国の使節団が東トルキスタンを横断した15世紀末～16世紀初頭にかけての頃には既にメインルートとして用いられていたことが想定される。

4.1.4. インド・カシュガルルート

本稿で紹介した限りでは、このルートが利用されたのは〔TR; BG〕の記述においてである。

ミールザー・アブ・バクルの子ボスタンギール・ミールザー（Bustangīr）は（i）ルートを辿った後、（ii）ルートを經由してウズベク領に向かい、ゴーエシュは道程（ii）を辿ってムガル帝国からヤルカンドに向かっている。また、ゴーエシュが旅した当時、道程（ii）⁴⁹を毎年隊商が往復していたことが述べられている〔BG: N807〕。

4.2. カシュミール道

ここで問題になるのが〔KhN〕に見える「カシュミール道」である。イスラーム世界から中国に向かうルートとして第一に紹介され、宿駅の存在が示され〔KhN: 39〕でいながら、他の情報が与えられておらず、その名称と中国の嘉峪関という目的地からして、カシュミールと嘉峪関を結ぶルートであるということは想像がつくものの、今までその実際の道程の検討はなされてこなかった。

ここで考えるべきは1516年という〔KhN〕の成立年代である。著者のキターイーが実際に明に赴いている〔小田 1969: 109〕ことから、彼の情報は凡15世紀末～16世紀初頭のもと考えられる。これと前後して成立した『西域土地人物略』でも三つのルートが示されており〔堀 1978: 45〕、その北並行路と南並行路は各々〔KhN〕のモグール道、ホタン道と概ね一致する。となると、残る天山南麓を走る道程③が〔KhN〕でいう「カシュミール道」に一致するのではなかろうかという仮説が生じる。〔人物略〕にはカシュミールについての記述が見えないため一見この仮説は荒唐無稽に見えるが、道程③を辿れば、アクスからヤルカンドにも進むことができ、道程④（ii）に接続し、そのままカシュミールに進むことができる。このルートについては、タシュケントからトルファンまで全3ヶ月行程に90の宿駅があったという〔TR: 205b〕記述から、その数の是非は措くとしても、宿駅の存在も明らかで、〔KhN〕での「カシュミール道」の記述に一致する。

以上より、〔KhN〕の「カシュミール道」とは、嘉峪関から天山南麓ルートを辿り、ヤルカンドからカシュミールに向かうものであると比定できる。

4.3. 各道の興廃

前節にて明代には東トルキスタンから中国へ向かう道が三つあり、ヤルカンドからは更にカシュミールに向かう道も存在することが判明し、各々の道の大凡の道程も明らかになった。続いてこれらの諸道の興廃について検討する。

前節でも既に触れたように、各々のルートの明代における大体の利用年代については以下の如くである。この際、先の節で触れた④インド・カシュガルルートについては、③カシュミール道に含めておく。

①モグール道：14世紀末～15世紀前半。

②ホタン道：明代全般。但しメインルートではない。

③カシュミール道：主に15世紀末～17世紀初頭

49 道程（ii）については、ヤルカンドからサリコル経由でカシュミールに出る現カラコルム・ハイウェイ〔Lurje 2009〕に一致するものと思われる。

以上を踏まえると、明代東トルキスタンの交通事情の傾向については、当初①モグール道が主要幹線として用いられていたものの、15世紀中葉以降に徐々に廃れ、③カシュミール道が主に使われるようになって明代に至り、②ホタン道は明代全般を通して利用されていたが、あくまでメインルートになることはなかった、と総括することができる。

4.4. 北方からの圧力

では、こうした傾向は何故生じたのだろうか。この傾向は実はモグール・ウルスの勢力圏の変遷と極めて高い相関性を示している。

先述の如く、モグール・ウルスはイリ河谷のアルマリクを中心に天山山脈両側を占めていたが、ペルシア語史料に「カルマク」と見えるオイラトなどの新興遊牧民に圧迫され、ホボク・セイル、ボロタラ、イリなど天山以北の重要な草原をことごとく失い〔濱田 1998: 100〕、定住民化して天山南麓に屏息した。

〔TR〕において「カルマク」の記述が初めて現れるのはヴァイス・ハンの治世の記事でのことで、ヴァイス・ハンは異教徒カルマクに対して聖戦を行ったが、「ハンは Qalmāq と61度戦ったが、勝ったのはたった一度だけであった」〔TR: 23〕という。

ナッカーシュが帰路をホタン道に採った主要原因たる1422年1－3月の「騒乱」も、〔実録〕の記事より、この時のモグールのヴァイス・ハン（歪思）とオイラトのタイピン（太平）の交戦に比定されている〔小野 2010: 293〕。

明側の記述もこの事実を裏付ける。明史瓦剌伝によると、オイラト（瓦剌）が初めて哈密に侵攻したのが1421年夏のことで、その後1440年、1445年と哈密を再度攻撃し、1449年には甘州を攻撃している。1495年には明の支援を受けてトルファンのアフマド・ハン（阿黒馬汗）と戦って哈密を奪取し、1518年にトルファンと和解し、1530年から再びトルファンと対立し、その後については遺憾ながら記録されていない〔明史外国伝九: 8498-8503〕。それ以降のオイラトの動静については〔明実録〕に記録が断片的に見え、トルファンとの衝突は1536年、1538年、1540年、1546年、1592年に散見され〔明実録: 694-740〕、万暦期以降その勢力を増大している⁵⁰〔考古録 6. 8a〕。

5. む す び

以上、明代東トルキスタンの交通事情について本稿で新たに指摘された点は以下の通りである。

- ・明代、東トルキスタンを經由して中国に向かうには、①モグール道、②ホタン道、③カシュミール道の三つがあり、各々多数の宿駅を擁していた。
- ・①モグール道は嘉峪関から哈密、トルファン、ユルドゥズを経てイリ河谷に向かうルート。
- ・②ホタン道はサリグ・ウイグル人の占める砂漠を経て、ホタン、ヤルカンド、カシュガル、フェルガナを進むルート。
- ・③カシュミール道は嘉峪関から哈密、トルファンを経て天山南麓沿いにヤルカンドに向かい、その後カシュミールやバダフシャーン・インド方面に向かうルートであるが、アクスからカシュガルを経て、フェルガナ方面に向かう例も多かった。
- ・明代当初はモグールの本拠地が置かれていたイリ河谷を通る①モグール道がメインルートとして用いられて

50 後にその支族ジュンガル部はガルダンの許で17世紀末にタリム盆地を制覇している〔宮脇 1995: 204〕。

いた。

- ・オイラトを筆頭とする新興遊牧勢力の侵攻（1421年～）で、モグールは天山以北の重要な草原をすべて失って〔濱田 1998: 100〕南遷し、モグール側が保持し、一定治安を維持していた③カシュミール道が代わってメインルートとなった。
- ・スルターン・サイード・ハンがマンスール・ハンに服属する（1516年）と暫くの間モグール・ウルスは大いに平和を享受し、特に③カシュミール道の交通は大いに容易になった〔TR: 47〕。
- ・しかしなおオイラトの攻勢は続き、1550年以降この道では安全のため隊商を組んでの交通が主となり〔HM; TD〕、やがて17世紀初頭には隊商を組んでさえ危険が伴うようになった〔BG: N 833〕。

以上、明代東トルキスタンの交易路の三つの道程を特定し、各々の興廃について検討した。その道程は必ずしも他の時代の交易路の道程と一致するものではなく、天山南路がメインルートとなったのは16世紀になってからにすぎないことが判明した。以上の成果より、明代東トルキスタンでの各時期の他の使節団や隊商、軍勢の動きが整合的に説明できるのみならず、当該地域のパクス・モンゴリカ以前と近現代以降の間をつなぐ交易路の変遷の像が提示できたかと考える。

本稿では交易路がどのように維持・運営されていたかの制度面について究明することができなかった。このような課題については次稿以降で究明していきたい。

参考文献

一次史料

BG: Ricci, Matteo, M. d'Elia (ed.).

1942-1949 *Storia dell'introduzione del cristianesimo in Cina*, Roma

BN: 間野英二

1995 『パーブル・ナーマの研究』 1, 松香堂

GN: Oxford. Bodleian Library. Elliot 422: 小野 浩

2010 ギヤースッディーン・ナッカーシュのティムール朝遣明使節行記録 全訳・註解—ハーフィズィ・アブルー『バイス
ングルの歴史精華』から—『ユーラシア中央域の歴史構図13～15世紀の東西』総合地球環境学研究所, 345-402

HAM: 川口琢司

2011 ハーフィズ・アブルーの地理書におけるマー・ワラー・アンナフルの条について、『イスラム文化研究』99, 61-85

HM: Ramusio, Giovanni Battista.

1574 *Navigazioni e Viaggi*, Venezia: Nella stamperia de Givnti

KhN: Khiṭāʾī, Alī Akbar.

1993 *Khaṭāy nāmāh: sharḥ-i mushāhadāt-i Sayyid 'Alī Akbar Khiṭāʾī, mu 'āṣir-i Shāh Ismāʿīl Ṣafavī dar Sarzamīn-i Chīn*, Tīhrān

NQ: Le Strange, G. (ed. & tr.)

2006 *The Geographical Part of the Nuzhat Al Qulub*, London

TD: de Busbecq, Ogier Ghislain.

1927 *The Turkish Letters of Ogier Ghiselin de Busbecq, Imperial Ambassador at Constantinople, 1554-1562: Translated from the Latin of the Elzevir Edition of 1663*, London: LSU Press

TR: Mīrzā Muhammad Haydar Dughlāt, Thackston, W. M. (ed.)

1996 *Mirza Haydar Dughlat's Tarikh-i-Rashidi: a history of the khans of Moghulistan*, vol. 2. Harvard University, Dept. of Near Eastern Languages and Civilizations

ZN I: Yazdi, Maulānā Sharfuddīn 'Alī.

1885 *The Zafarnāmah*, vol. 1. Calcutta: Asiatic Society of Bengal

ZN II: ____.

1888 *The Zafarnāmah*, vol. 2. Calcutta: Asiatic Society of Bengal

行程記：陳誠；周連寬（校注）

1991 『西域行程記；西域番國志』中華書局，33-63

番國志：陳誠；周連寬（校注）

1991 『西域行程記；西域番國志』中華書局，65-116

人物略：李之勤（編）

2012 『西域史地三種資料校注』新疆人民出版社

明史：張廷玉

1974 『明史』中華書局

明實錄：京都大學文學部内陸アジア研究所〔編〕

1974 『明代西域史料：明實錄抄』京都大學文學部内陸アジア研究所

圖志：袁大化（編）

1992 『新疆圖志』上海古籍出版社

考古錄：俞浩

1847 『西域考古錄』

二次資料

CMRS: Cahiers du Monde Russe et Soviétique

EIr: Encyclopedia Iranica

EI2: Encyclopedia of Islam New Edition

Aubin, J.

1971 Réseau pastoral et réseau caravanier: les grand'routes du Khurassan à l'époque mongole, in: Aubin, J. (ed.) *Le monde iranien et l'Islam : sociétés et cultures*, vol. 1., Paris

Balland, D.

1990 Čarikār, In: *EIr* Vol. IV, Fasc. 7, 812-814

班固

1962 『漢書』中華書局

Barthold, V. V.

1928 *Turkestan Down to the Mongol Invasion*, Oxford

1958 *Four Studies on the History of Central Asia 2: III. Ulugh-Beg*, V. and T. Minorsky (transl.), Leiden: E. J. Brill

1962 *Four Studies on the History of Central Asia 1: I. A short history of Turkestan, II. History of Semirechye*, V. and T. Minorsky (transl.), Leiden: E. J. Brill

2002 Dughlāt, *EI2*, II, 621, B. Spuler (tr)

Beaumont, P.

1968 Qanats on the Varamin Plain, Iran, in: *Transactions of the Institute of British Geographers*, 45, 169-179

Bernardini, M. and A. Vanzan

2007 Italy iv. Travel Accounts. *EIr*, Vol. XIV, Fasc. 3, 250-259

- Boyle, J.
2002 Kalmuk, *EI2*, IV, 512
- Bregel, Y.
1991 Turko-Mongol influences in Central Asia. In: R. L. Canfield (ed.) *Turko-Persia in Historical Perspective*, 53–77
2003 *An Historical Atlas of Central Asia*, Leiden
- Bretschneider, E.
1910 *Mediaeval researches from eastern Asiatic sources : fragments towards the knowledge of the geography and history of central and western Asia from the 13th to the 17th century*, vol. 2., London
- 岑 仲勉
1966 『中外史地攷證』 太平書店
- Considine, J.
2008 *Dictionaries in Early Modern Europe: Lexicography and the Making of Heritage*, Cambridge
- D'Avezac, M.
1865 *Note sur une mappemonde turke du XVIe siècle conservée à la bibliothèque de Saint-Marc à Venise*, Paris
- Dani, A. H.
2003 The Trans-Pamir States. In: Adle, C. *Development in Contrast: From the Sixteenth to the Mid-nineteenth Century*, UNESCO, 235–346
- Darby, J. (tr.)
1723 *The history of Timur-Bec, known by the name of Tamerlain the Great, emperor of the Moguls and Tartars: being an historical journal of his conquests in Asia and Europe*, London
- De Busbecq, O. G.
1927 *The Turkish Letters of Ogier Ghiselin de Busbecq, Imperial Ambassador at Constantinople, 1554–1562: Translated from the Latin of the Elzevir Edition of 1663*, London: LSU Press
- Denison, R. (tr.) and N. Elias (ed.)
1895 *A history of the Moghuls of central Asia: the Tarikh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haidar, Dughlat*, London
- D'Encausse.
1970 Les routes commerciales de l'Asie centrale et les tentatives de reconquête Astrakhan d'après les registres des Affaires importantes des Archives ottomanes. *CMRS*, XI, 3
- Doerfer, G.
1963 *Mongolische Elemente im Neupersischen*, Wiesbaden
1965 *Türkische Elemente im Neupersischen: alif bis tā*, Wiesbaden
1967 *Türkische Elemente im Neupersischen: ġīm bis kāf*, Wiesbaden
1975 *Türkische Elemente im Neupersischen (Schluss) und Register zur Gesamtarbeit*, Wiesbaden
- Emmerick, R.
1986 Āqsū (1), In: *EI*, Vol. II, Fasc. 2, 199
- 榎 一雄
1974 明末の肅州, 『宇野哲人先生白寿祝賀記念東洋学論叢』, 再録『榎一雄著作集 第三卷 中央アジア史Ⅲ』1993
1978a 明代の交通, 『月刊シルクロード』4–2. 1978, 再録『榎一雄著作集 第三卷 中央アジア史Ⅲ』1993
1978b 傅安の西域奉使について, 『東宝学会創立二十五周年記念東方学論集』1972, 再録『榎一雄著作集 第三卷 中央アジア史Ⅲ』1993
- Fairbank, J. K.
1942 Tributary Trade and China's Relations with the West. In: *The Far Eastern Quarterly*, 129–149
- Fletcher, Joseph F.
1968 China and Central Asia, 1368–1884. In: J. K. Fairbank (ed.) *The Chinese World Order: Traditional China's Foreign*

- Relations*, Cambridge, 206–224, 337–368. (Reprinted in 1995 in Beatrice Forbes Manz (ed.) *Studies on Chinese and Islamic Inner Asia*, Variorum, 206–224, 337–368.)
- Forsyth, T. D.
1875 *Report of a Mission to Yarkund in 1873*, Calcutta
- Fragner, B.
1990 Caravan, In: *EIr*, Vol. IV, Fasc. 7, 795–798
- Goodrich, L. Carrington and Chaoying Fang (eds.)
1976 *Dictionary of Ming Biography 1368–1644*, New York and London: Columbia University Press
- Grousset, R.
1960 *L'empire des steppes*, Paris
- Guchinova, E-B.
2006 *The Kalmyks*, David Lewis (tr.), New York
- 濱田正美
1998 モグール・ウルスから新疆へ, 『岩波講座世界歴史 13 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店, 97–119
- 羽田 明
1965 明帝国とオスマーン帝国, 『西南アジア史研究』14, 95–100
- 羽田 亨
1909 蒙古駅伝考, 『東洋学報』, 237–275, 再録『羽田博士史学論文集 上』1957, 1–31
1912 帖木児と永楽帝: 帖木児の支那征伐の計画, 『芸文』3, 10, 17–34, 再録『羽田博士史学論文集 上』1957, 477–490
- 早川尚志
2014 モグール・ウルスの交易路について—明とティムール朝のはざまにて—, 『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』21, 139–158
- Hecker, Felicia J.
1993 A Fifteenth-Century Chinese Diplomat in Herat. *Journal of the Royal Asiatic Society* 3, 3, 1, 85–98
- Hedin, S.
1899 *History of the Expedition in Asia 1927–1935*, New York
1966 *Central Asia atlas*, Stockholm
- Henderson, G. and A. Hume
1877 *Lahore to Yarkand: incidents of the route and natural history of the countries traversed by the expedition of 1870, under T. D. Forsyth, Esq., C. B.*, London
- 堀川 徹
1991 シャイバーン朝とオスマン帝国—文書史料に見る交易路の変遷—, 『西南アジア史研究』(34), 43–75
- 堀 直
1978 中央アジア及び西アジアに関する明代の一史料—「西域諸国」と「西域土地人物略」について, 『イスラム世界』(14), 37–55
1982 『西域土地人物略』について, 『歴史における民衆と文化』国書刊行会, 831–844
- Houtum-Schindler, A.
1888 On the Length of the Persian Farsakh. In: *Proceedings of the Royal Geographical Society and Monthly Record of Geography, New Monthly Series* 10, 9, 584–588
- Jackson, P.
1991 Chaghatayid Dynasty. *EIr*, Vol. V, Fasc. 4, 343–346
- ジャリロフ・アマンベク (編)
2008 『「ターリーヒ・ラシーディー」テュルク語訳附編の研究』NIHU プログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点

- 神田喜十郎
1927 明の陳誠の使西域記に就いて、『東洋学報』16, 3, 65-86, 再録『東洋学説林』1948, 23-41
- Kara, D. S.
2010 Kalmak: The enemy in the Kazak and Kirghiz epic songs. *Acta Orientalia* 63, 167-178
- Karimova, N.
2003 Chen Cheng's Travels to Samarkand (the 15th century). In Choi Han-Woo (ed.) *International Journal of Central Asian Studies* 8, 105-113
- Kauz, R.
2005 *Politik und Handel Zwischen Ming und Timuriden, Wiesbaden*
- 川口琢司
2011 ハーフイズ・アブルーの地理書におけるマー・ワラー・アンナフルの条について、『イスラム文化研究』99, 61-85
- 川名公平（他訳註）
1982 『中国キリスト教布教史』マッテオ・リッチ（著）岩波書店
- Kim, H.
1999 The Early History of the Moghul Nomads: The Legacy of the Chaghatai Khanate. In: Reuven Amitai-Preiss & David O. Morgan (eds.), *The Mongol Empire & Its Legacy*, Leiden, 290-318
- Le Starnge, G.
1905 *The lands of the Eastern Caliphate: Mesopotamia, Persia, and Central Asia from the Moslem conquest to the time of Timur*, New York
- Litvinskiĭ, B. A.
1998 Excavations iv. In Chinese Turkestan, *EIr*, Vol. IX, Fasc. 1, 106-112 & Vol. IX, Fasc. 2, 113
- Lurje, P.
2009 Yarkand, In: *EIr*, Vol. V, Fasc. 5, 460-484
2012 Kashgar, In: *EIr*, Vol. XVI, Fasc. 1, 48-50
- Maitra, K. M. (transl.)
1970 A Persian Embassy to China: an extract from Zubdatu't Tawarikh of Hafiz Abru, New York
- Mannerheim, C. G.
1969 *Across Asia from West to East in 1906-1908*, Helsinki
- 間野英二
1964 十五世紀初頭のモグーリスターン：ヴァイス汗の時代、『東洋史研究』23(1), 1-27
1977 『中央アジアの歴史』講談社現代新書
1984 トルキスタン, 島田虔次（編）
1983 『アジア歴史研究入門』4, 同朋舎, 41-142
1995 『バーブル・ナーマの研究』1-4, 松香堂
- Manz, B. F.
1983 The Ulus Chaghatay before and after Temür's Rise to Power. The Transformation from Tribal Confederation to Army of Conquest, *Central Asiatic Journal* 27/1-2, 1983, 79-100
- 丸山鋼二
2009 新疆におけるイスラム教の定着：東チャガタイ汗国：新疆イスラム教小史（3）, 『文教大学国際学部紀要』20(1), 147-160
2012a 新疆クチャ地方のイスラム化と仏教文化破壊：中国新疆イスラム教小史（4）, 『文教大学国際学部紀要』22(2), 121-141
2012b 新疆トルファン地方のイスラム化と仏教衰退：中国新疆イスラム教小史（5）, 『文教大学国際学部紀要』23(1), 85-100
2013 新疆ハミ地方のイスラム化：中国新疆イスラム教小史（6）, 『文教大学国際学部紀要』23(2), 59-75

松田寿男

1956 『古代天山の歴史地理学的研究』 早稲田大學出版部

松井 太

2008 東西チャガタイ系諸王家とウイグル人チベット仏教徒—敦煌新発現モンゴル語文書の再検討から、『内陸アジア史研究』(23), 25–48

Matuz, J. (ed.)

L'ouvrage de Seyfî Çelebî: historien ottoman du XVIe siècle, Paris

McChesney, R. D.

1990 Central Asia vi. In the 16th–18th Centuries. *EI*, Vol. V, Fasc. 2, 176–193

Millward, James A.

2007 *Eurasian crossroads: a history of Xinjiang*, New York

満井隆行

1928 明の陳誠の西使について、『山下先生還暦記念東洋史論文集』 六盟館, 589–614

宮脇淳子

1995 『最後の遊牧帝国：ジュンガル部の興亡』 講談社

宮崎市定

1947 帖木児王朝の遣明使節、『学芸』 4–6, 再録『アジア史研究第三』 1963

小田寿典

1969 十六世紀初頭の中国に関するイスラム史料—アリ＝エクベル著「中国記」の評価をめぐって、『史林』 52–6, 90–111

小野 浩

2010 ギャースッディーン・ナッカーシュのティムール朝遣明使節行記録 全訳・註解—ハーフィズィ・アブルー『バイスングルの歴史精華』 から—『ユーラシア中央域の歴史構図 13～15世紀の東西』 総合地球環境学研究所, 275–430

Pétis de La Croix, F. (tr.)

1722 *Histoire de Timur-Bec, connu sous le nom du grand Tamerlan, empereur des Mogols & Tartares: en forme de journal historique de ses Victoires & conquêtes dans l'Asie & dans l'Europe*, Paris

Quatremère, E. M.

1843 *Notice de l'ouvrage persan qui a pour titre 'Matla-assaadeïn oumadjma-albahrein' et qui contient l'histoire des deux sultans Schah-Rokh et Abou-Saïd, Extrait des notices et extraits des manuscrits de la bibliothèque du roi* 14 :1, Paris

Rajkai, Z.

2007 *The Timurid Empire and the Ming China: Theories and Approaches Concerning the Relations of the Two Empires*. Doctor Thesis

2010 Japanese and Chinese research on the Timurid-Ming Chinese contacts, In: *Acta Orientalia* 63(1), 63–103

Richtsfeld, B.

1985 *Die Aufzeichnungen des Ch'en Ch'eng und Li Hsien über ihre Gesandtschaftsreise nach Herat: Ein chinesischer Beitrag zur Kenntnis Mittelasiens im 15. Jahrhundert*, München (master thesis)

Ritter, C.

1832 *Die Erdkunde von Asien*, Berlin

Rossabi, M.

1970 *Ming China's Relations with Hami and Central Asia, 1404–1513: a Reexamination of Traditional Chinese Foreign Policy*, New York: Columbia University (an unpublished dissertation).

1975 *China and Inner Asia: From 1368 to the Present Day*, London

1976 Two Ming Envoys to Inner Asia. *T'oung Pao* 62, 1–3, 1–34

1983 A Translation of Ch'en Ch'eng's Hsi-yü fan-kuo-chih. *Ming Studies* 17, 49–59

1991 Chinese Turkestan iv. In the Mongol Period. *EI*, Vol. V, Fasc. 5, 473–474

- Schefer, C.
1883 Trois chapitres du Khitay namèh. Texte persan et traduction française. In: *Textes et traductions publiés par les professeurs de l'École spéciales des langues orientales vivantes à l'occasion du sixième Congrès international des orientalistes réuni à Leyde*, Paris, 29–84
- Serruys, H.
1967 Sino-Mongol relations during the Ming II: the tribute system and diplomatic missions (1400–1600). In: *Mélanges chinois et bouddhiques* 14, Brüssel: Institute Belge des hautes etudes chinoises
1975 Sino-Mongol relations during the Ming III: trade relations: the horse fairs (1400–1600). In: *Mélanges chinois et bouddhiques* 17, Brüssel: Institute Belge des hautes etudes chinoises
- Shaw, R. B.
1876 A Prince of Kashghar on the Geography of Eastern Turkistan, *Journal of the Royal Geographical Society of London* 46, 277–298
- 島田虔次 (編)
1983 『アジア歴史研究入門』 4–5, 同朋舎
- Soucek, M.
2001 Ġiāī-al-Dīn Naqqāš, *EIr*, Vol. X, Fasc. 6, 599–600
- Spuler, B.
1956 Central Asia v. In the Mongol and Timurid Periods, *EIr*, Vol. V, Fasc. 2, 172–176
- Stein, M. A.
1907 *Ancient Khotan*, 2 vols., Oxford
1921 *Serindia: Detailed Report on Explorations in Central Asia and Westernmost China*, 5 vols., Oxford
1923 *Memoir on Maps of Chinese Turkistan and Kansu*, Dehra Dun
1928 *Innermost Asia: Detailed report on explorations in Central Asia, Kan-su and Eastern Iran*, 4 vols., Oxford
1933 *On Ancient Central Asian Tracks: Brief Narrative of Three Expeditions in Innermost Asia and North-Western China*, London
- Subtelny, M. E. and Melville, C.
2002 Ḥāfez-e Abru, *EIr*, Vol. XI, Fasc. 5, 507–509
- Thackston, W. M. (tr.)
1996 *Mirza Haydar Dughlat's Tarikh-i-Rashidi: a history of the khans of Moghulistan*, vol. 3. Harvard University, Dept. of Near Eastern Languages and Civilizations
- Togan, I.
1991 Chinese Turkestan v. Under the Khojas, *EIr*, Vol. V, Fasc. 5, 474–476
- Trigault, N.
1616 *Histoire de l'expedition chrestienne au royaume de la Chine entreprise par les PP. de la compagnie de Iesus: comprise en cinq liures, esquels est traicté fort exactement et fidelement des mœurs, loix et coutumes du pays, et des commencemens tres-difficiles de l'Eglise naissante en ce royaume/tirée des commentaires du P. Matthieu Riccius par le P. Nicolas Trigault de la mesme compagnie; et nouvellement traduite en françois par le Sr. D. F. de Riqueborg-Trigault*, Lyon
- Trotter, H.
1878 On the Geographical Results of the Mission to Kashghar, under Sir T. Douglas Forsyth in 1873–74, In: *Journal of the Royal Geographical Society of London*, Vol. 48, 173–234
- Veneri, T.
2012 Il riscatto geografico di Marco Polo, *Quaderni Veneti*, 1, 2, 33–57
- 和田博徳
1958 明代の鐵砲傳來とオスマン帝國：神器譜と西域土地人物略（慶應義塾創立百年記念論文集），『史学』31(1/2/3/4)，692–719

渡辺 宏

1971 明代回教諸国朝貢表, 『東洋大学アジアアフリカ文化研究』

Wessel, C.

1924 *Early Jesuit Travellers in Central Asia: 1603–1721*, Delhi

Yazici, T.

1985 ‘Alī Akbar Kεṭā’ī, *ELr*, Vol. I, Fasc. 8, 857

Yule, H. (ed. and tr.)

1913 *Cathay and the Way Thither. Being a Collection of Medieval Notices of China* Vol. 1–4, London: Hakluyt Society

中國邊疆歷史語文學會

1964 『新疆研究』 中國邊疆歷史語文學會

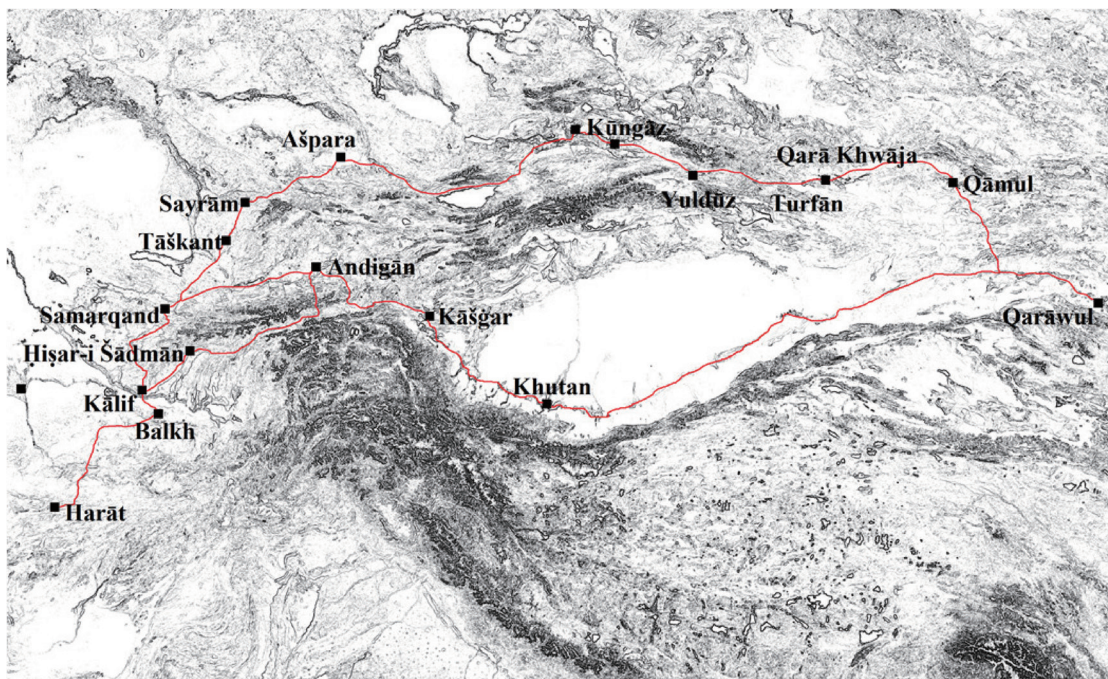
钟兴麒

2008 『西域地名考录』 北京国家図書館出版社

参考地図



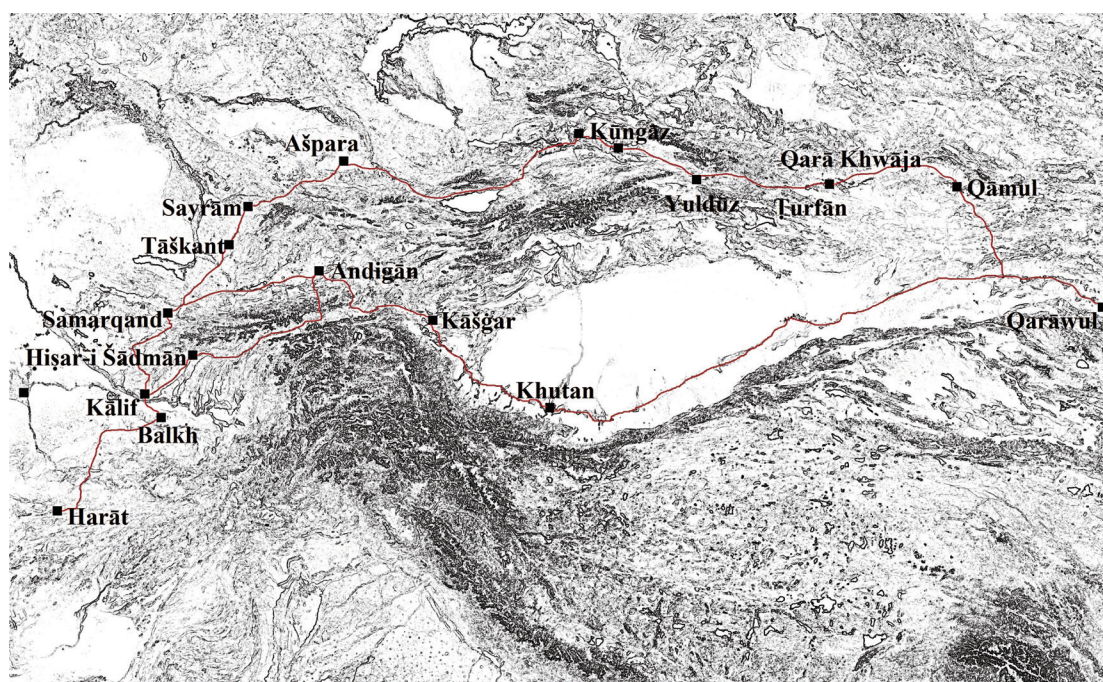
地図1：傳安の道程【道程1】早川作成



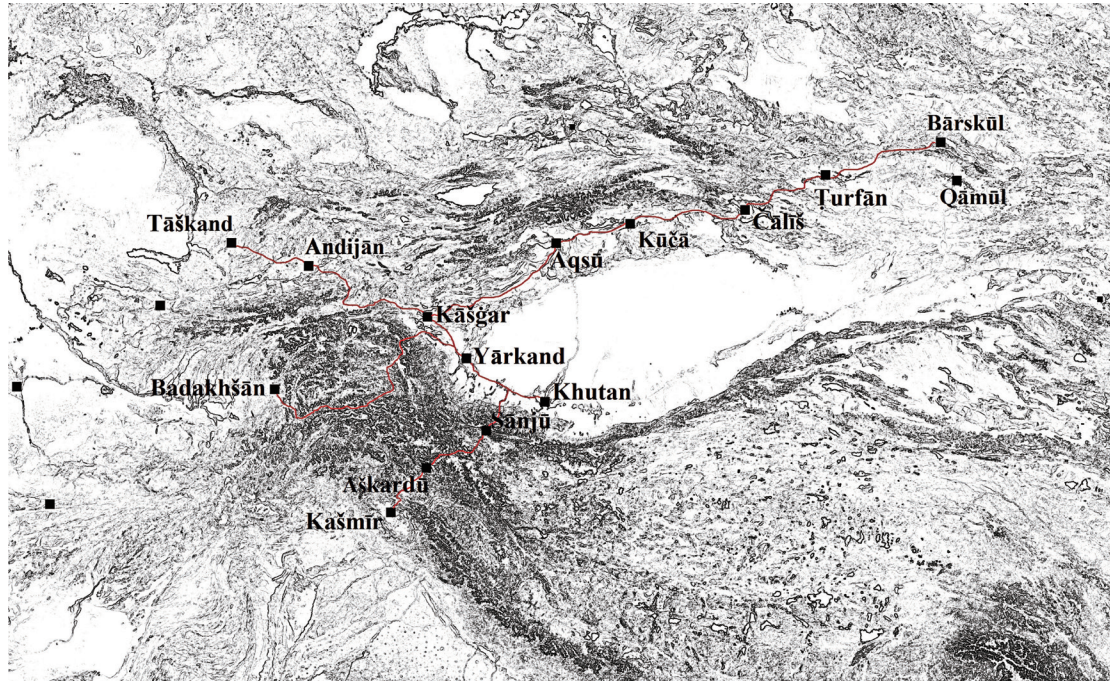
地図2：[ZN] の道程【道程2】早川作成



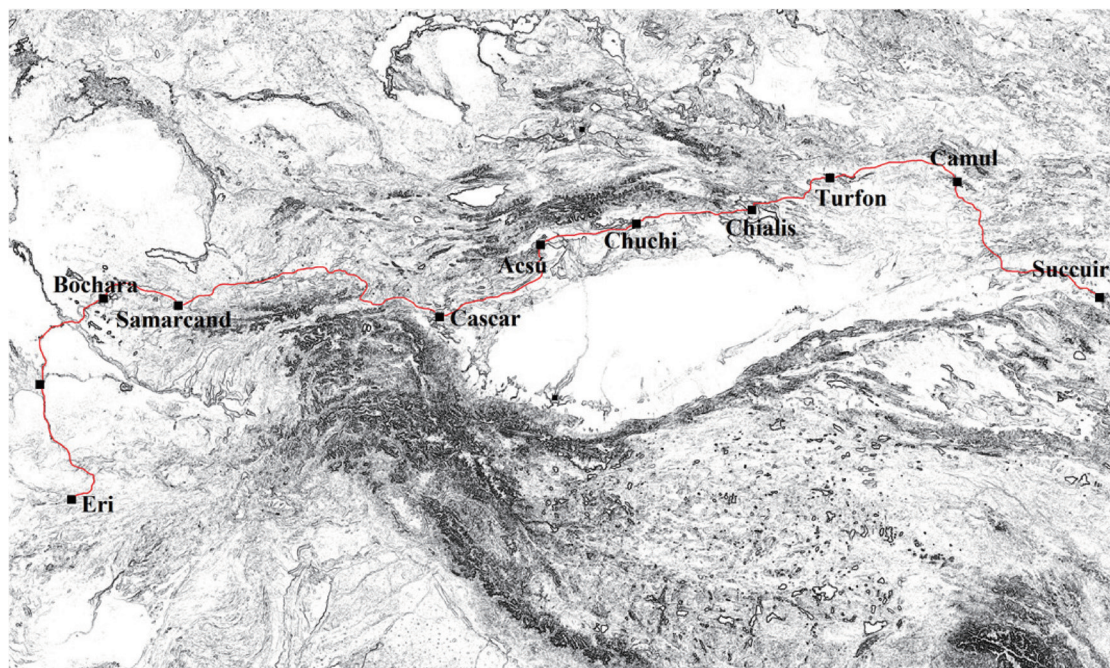
地図 3：陳誠の道程【道程 3】 早川作成



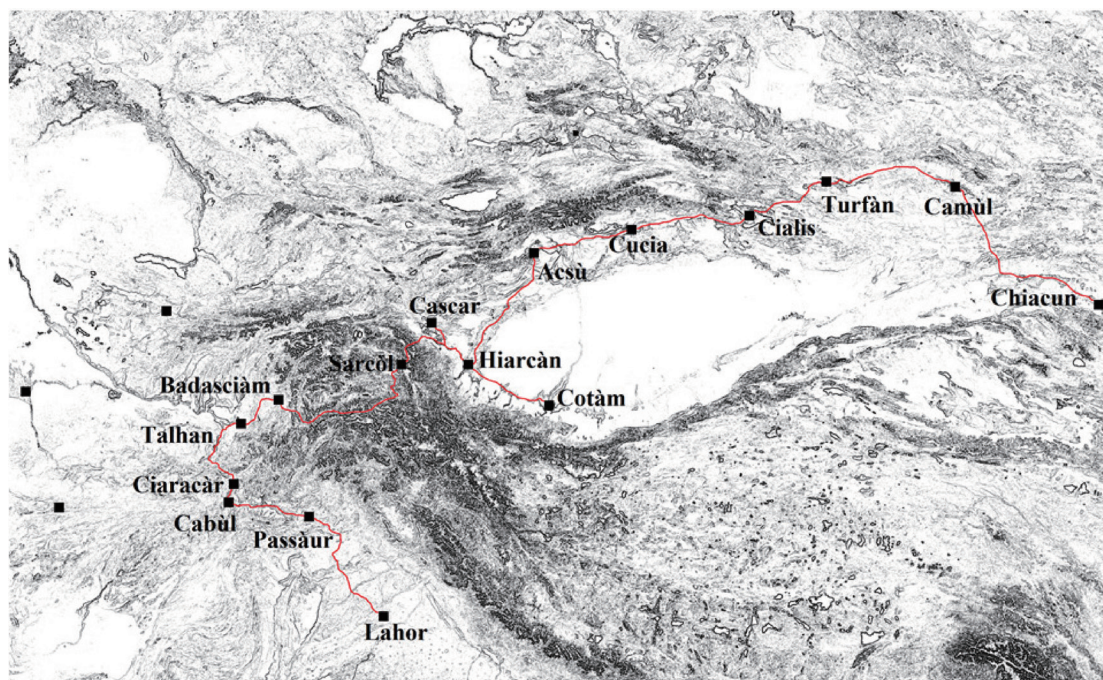
地図4：[GN]の道程【道程4】【道程5】早川作成



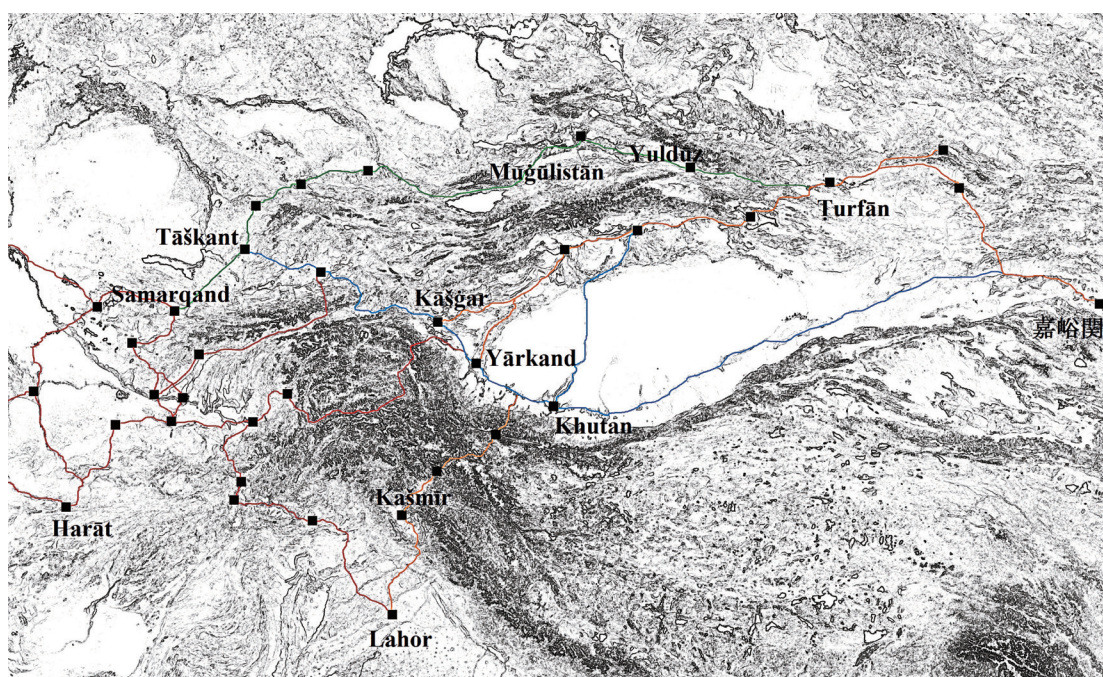
地図5：[TR] の道程【道程6】【道程7】【道程8】早川作成



地図6：[HM] の道程【道程9】早川作成



地図7：[BG] の道程【道程10】【道程11】【道程12】 早川作成



地図8：全体地図 早川作成
カシュミール道：橙色，モグール道：緑色，ホタン道：青色